特攻隊八十周年

帰って来た蛍

～永遠の言ノ葉～

冨樫　勝行　陸自81

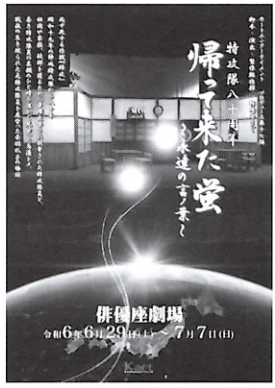
俳優座での舞台「帰って来た蛍」を鑑賞する機会があった。

家族やふるさとへの思いを胸に特攻攻撃で戦死した日、お世話になった知覧基地近くの食堂の女将さんの元に蛍になって帰ってくるという物語である。

満席の公演のあと、知覧基地近くで陸軍指定食堂を営んでいて多くの特攻隊員の面倒をみた「特攻の母鳥濱トメさん」が、孫である赤羽潤氏に戦後語ってくれたことを紹介してくれた。

特攻魂とは家族、ふるさと、祖国日本に対する『思いやりの心』であった。特攻隊員たちが命をかけて守りたいものがあった。平和で繁栄した日本がここにあるのは彼らのおかげであることを忘れてはいけない…。

「帰って来た蛍」は、「知覧特攻の母鳥濱トメ顕彰会」理事長でもある株式会社カートエンターテイメント代表取締役社長柿崎ゆうじ氏の脚本・演出・製作総指揮で、平成20年初演から8回目の再演である。これまで約2万5500人が鑑賞し、特攻隊の真実を平成、令和に伝承してきたとのことである。



令和2年刊行の『特別攻撃隊全史第二版』（公益財団法人　特攻隊戦没者慰霊顕彰会）によれば、「昭和19年9月8日、第4航空軍司令官として陸軍次官であった冨永恭次中将が着任した。海軍は10月5日、大西瀧治郎中将を第1航空艦隊司令長官として発令した。

当時海軍航空の実態を熟知し、かつ10月12～14日の台湾沖航空戦の実況を目撃した大西中将は、戦局打開のため胸中深く体当たり攻撃の指導を覚悟したであろう。

陸軍次官であった冨永中将は、陸軍最初の航空特攻万朶隊、富嶽隊編成の動きは知っていたであろうし、昭和19年8月20日の北九州における野辺重夫軍曹の体当たりによるB29の2機撃墜の報は、感激をもって聞いていたであろう。かくて、この二人の将帥によって、陸海軍の航空特攻が比島作戦において本格的に開始されることになった。（中略）

特攻隊員たちは『俺が命を捨てることによって、愛する祖国、愛する妻子、尊敬する父母を護ることが出来るなら喜んで死ぬぞ』と覚悟したのである。そして彼等には他の人には出来ない飛行機あるいは潜航艇などを操縦する腕と、国民が心をこめて作り上げた飛行機、舟艇などが与えられていた。国を護る責任感と、同胞を愛する純粋な魂が特攻を支えた精神である」

あれから80年、先人の偉業を後世に伝えていかなければいけないとの気持を新たにした。